

# ブツダとナーガールジュナの中道思想

山 本 和 彦

## はじめに

『スッタニパータ』(経集)の最古層である第四章「八つの詩頌の章」<sup>(1)</sup>と第五章「彼岸に至る道の章」のなかには、ブツダ(仏陀)の金口直説が残されている。そこに見られるブツダの中心思想の一つは、中道である。中道とは両極端の否定である。ナーガールジュナ(龍樹)は、ブツダの中道思想を受け継ぎ、『根本中頌』<sup>(2)</sup>を著した。難解な『スッタニパータ』と『根本中頌』は、両方を重ね合わせると意味が浮き上がってくる。そのとき、『根本中頌』は『スッタニパータ』の註釈書のように見えてくる。それゆえ、ナーガールジュナは第二のブツダと呼ばれている。ブツダにはナーガ(龍)<sup>(3)</sup>という異名もあり、ナーガールジュナはブツダの思想だけでなく、称号も受け継いでいる。『チヤインドーギヤ・ウパニシャッド』と『プリハッドアラーニヤカ・ウパニシャッド』の解脱への道は、ブツダによって中道という涅槃への道となった。そしてブツダの中道を、ナーガールジュナは受け継ぎ『根本中頌』を著した。本論文では、ブツダとナーガールジュナの中道思想を考察する。

## ウパニシャッド文献の「再生しない」

ブッダ以前のウパニシャッド文献としては、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』と『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』が思想的に重要である。<sup>(4)</sup> 仏教用語が確立するまでの初期の仏典では、ウパニシャッドやジャイナ教などの用語が使われた。<sup>(5)</sup> たとえば意味は異なるが、『スッタニパータ』第五章のタイトルにもなっている「彼岸に至る道」(パーラーヤナ)<sup>(6)</sup> という言葉は仏教独自の言葉ではなく、すでに前三五〇年頃のパーニニの『アシユターデイヤーイー』<sup>(7)</sup> などのなかに出てくる。<sup>(8)</sup>

『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』の末尾は、このウパニシャッドの結論を述べている。

ChU 8.15.1: ācāryakulād vedam adhītya yathāvidhānaṃ guroḥ karmāśeṣeṅgābhisamāvṛtya kuṭumbhe śucan  
deśe svādhyāyam adhiyāno dhārmikān vidadhād ātmāni sarvendriyaṇi sampratiśthāpyāhiṃsan  
sarvabhūtāny anyatra tirthebhyaḥ | sa khalv evaṃ vartayan yāvadyuṣaṃ brāhmalokam abhisampadyate |  
na ca punarāvartate na ca punarāvartate ||

〔学生期に〕学問の師(アーチャールヤ)の家でヴェーダを学習し、残った時間で人生の師(ゲル)のために規定に従って祭祀を行う。家〔住期〕に清浄な場所で聖典読誦を行い、宗教的義務を備えた人間を育てる。<sup>(9)</sup> 〔林住期と遊行期に〕すべての感官を自分のなかに引込める。<sup>(10)</sup> 〔すべての住期で〕神聖な場所以外では、すべての生き物を殺生しない。命ある限りこのように生活する。そのような人は、ブラフマンの世界に到達する。彼は再び戻ってこない。彼は再び戻ってこない。<sup>(11)</sup>

ここでの主題は、解脱への道である。命ある限り、四住期の規定を守って生きれば、解脱できることが述べられている。「感官を自分のなかに引込める」とは瞑想のことである。<sup>(12)</sup> 「再び〔この世に〕戻る」(punarāvartate)は、再生

の意味である。「再び戻つてこない」(na punarāvartate)とは生まれ変わつてこない、再生しない、つまり解脱するという意味である<sup>(13)</sup>。

次に、神道を行く者は再生しないことが、『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』で表現されている<sup>(14)</sup>。

BĀU 6.2.15: tām vaidyutām puruṣo mānasa eṭya brahmalokān gamayati | te teṣu brahmalokeṣu parāṇi parāvato vasantī | teṣāṃ na punarāvṛtiḥ ||

意所成のプルシヤは電光の世界に行き、彼ら(神道を行く人々)をブラフマンの諸の世界に行かせる。彼らはこのブラフマンの諸の世界において、遙か遠くに住む。彼らは再び戻つてこない。

解脱への道が述べられている。ウパニシャッドの解脱観では、解脱とはブラフマンの世界に行くことである。『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』八・一五・一と同様に、解脱した者は再び戻つてこない(na punarāvṛtiḥ)、つまり再生しないことが述べられている。

### 『スッタニパータ』の「再生しない」

ブッダはウパニシャッドを援用する。さらに『スッタニパータ』五一四は『根本中頌』二五・一〇に引用されており、この韻文はブッダとナーガールジュナとの直接のつながりを示す重要な詩頌である。ブッダは次のようにサビアに説法する。

SN 514: pajjena katena attanā

sabhiyā ti bhagavā

parinibbanagato viññākaṃkho

vibhavaṃ ca bhavaṃ ca vipphāḍhāya

vusitavā khinapunabhavo sa bhikkhu ||

「自ら作った道によって、サビアよ」と世尊(ブッダ)は〔答えた〕。「完全な涅槃に達し、疑いを越え、非生存と生存とを捨て、〔修道を〕完成し、再度の生存が尽きた人、それが比丘である」。

ここでの主題は涅槃への道である。そして、生存(bhava)と非生存(vibhava)という両極端を捨てるべきことが説かれている。両極端の否定は中道である。生存と非生存という両極端を捨てた道、つまり中道が完全な涅槃への道である。生存は身体のある状態、非生存は身体のない状態である。生存と非生存の繰り返し、輪廻である。「再度の生存が尽きた人」(khinapunabhavo)という表現は、「再び戻ってこない」(na punar-av-<sup>(15)</sup>reṭṭi)というウパニシャッドからの援用である。『スッタニパータ』の他の箇所でも、再生しないという意味の表現はある。<sup>(16)</sup>

SN 273: ye naṃ pajānanti yatonidānaṃ te naṃ vinodenti suṃohi yakkha |

te duttarapaṇ ogham imaṇ taranti atinapubbapaṇ apunabhavāyā || ti ||

〔ブッダ〕「それ(煩惱)が、何の因縁(で生じたもの)なのかを知る人々は、それ(煩惱)を取り除く。聞け、ヤッカ(夜叉)よ。彼らは、以前に渡ったことのない、この渡りがたい激流を渡る。再び生存しないため」云々。

SN 730: avijjā h' ayaṃ mahāmohe yen' idaṃ saṃsāraṃ ciraṃ |

vijjagatā ca ye sattā nāgacchanti punabbhavaṃ || ti ||

〔ブッダ〕「なぜなら、この無明は大きな無知であり、それによってこの輪廻は長いからである。しかし、明知に至った衆生たちは、再び生存に戻ってこない」云々。

SN 733: sammaddasā vedaguno sammadaññaṃ paṇḍita |

abhibhuyya mārasaṇyogaṃ nāgacchanti punabbhavaṃ || ti ||

〔ブツダ〕「正しく見る者であり、ヴェーダの達人である賢者たちは、正しく知って、魔の束縛に打ち勝って、再び生存に戻ってこなう」と。

SN 743: tasmā upādānakkhayā sammadānāya paṇḍitā |

jātikkhayaṃ abhiññāya nāgacchanti punabbhavam || ti ||

〔ブツダ〕「それゆえ、賢者たちは〔苦の発生を〕<sup>(17)</sup>よく知って、執着が消滅するから出生が消滅することをよく知って、再び生存に戻ってこなう」と。

SN 746: uccinnabhavarāṇhassa santacchittassa bhikkhuno |

viñño jātisamsāro n' atthi tassa punabbhavo || ti ||

〔ブツダ〕「生存の渴愛を断ち、心が寂滅した比丘は、出生する輪廻を越えている。彼に再度の生存はなす」<sup>18)</sup>。

SN 1121: tasmā tuvaṃ piṅgiya appannatto |

jāhassu rūpaṃ apunabbhavāya ||

〔ブツダ〕「それゆえ、あなたは、ピンギヤよ、不放逸であれ、物質を捨てよ、再び生存しないように」。

SN 1123: tasmā tuvaṃ piṅgiya appannatto |

jāhassu taṇhaṃ apunabbhavāya || ti ||

〔ブツダ〕「それゆえ、あなたは、ピンギヤよ、不放逸であれ、渴愛を捨てよ、再び生存しないように」と。

ウパニシャッド文献では「再生しない」は、「戻ってこなう」(na punarāv<sup>(19)</sup> vi)と表現されていたが、『スッタニパータ』では「生存しない」(na puna<sup>(20)</sup>/bhū, apuna<sup>(21)</sup>/bhū)と表現されており、「戻る」(āvartate, avrtti)が「生存」(bhava)に置き換えられている。仏教では、生存 (bhava) は無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死と

いう十二因縁(十二支縁起)の第十番目として重要な言葉であり、輪廻を象徴する言葉である。<sup>(18)</sup> なお、意味は同じで、異なる表現として「再び生と死を受けることもない」<sup>(19)</sup>や「再び母胎に入らない」<sup>(20)</sup>というものもある。

その一方で、ブッダはウパニシャッドの解脱への道で用いられている神道やブラフマンの世界という概念を継承することはなかった。

### 『スッタニパータ』の中道

『スッタニパータ』<sup>(21)</sup>のなかでの中道とは、両極端の否定である。

SN 778: ubhosu antesu vineyya chandanā phassanā pariññāya anānugiddho |

yad attagarāhi tad akubbhamāno na lippatī ditthasutesu dhiro ||

賢者は、両極端に対する欲望を捨て、接触をよく知り、貪らず、自ら非難するようなことを行わず、見聞したことに汚されない。

SN 801: yassubhavante pañidhida n' atthi bhavābhavāya idha vā huranā vā |

nivesanā tassa na santi keci dhammesu niccheyya samuggahitā ||

両極端に対して、生存と非生存に対して、現生と来生に対して、欲求することがない人は、諸の存在しているものに対して、<sup>(22)</sup>執着であると決定し、住処(執着)はまったく存在しない。

SN 1040: ko ubh' antam abhiññāya majjhe mantā na lippatī |

kaṃ brūsi mahāpuriso ti ko idha sibbanim accagā ||

「ティッサ・メッティア」誰が両極端をよく知っていて、よく考えていて、中間にも汚されないのですか。あなた(ブッダ)は、誰を偉大な人と呼ぶのですか。誰が現生で愛執を超えたのですか。

SN 1042: so ubh' antam abhiññāya majjhe mantā na lipati |

taṃ brūmi mahapuriso ti so iddha sibbhaṇiṃ accagā || ti ||

〔ブツダ〕「彼（涅槃に達した比丘）は両極端をよく知っていて、よく考えていて、中間にも汚されない。彼を偉大な人と私は呼ぶ。彼は現生で愛執を超えている」と。

両極端に対する欲望や執着が否定されている。それは煩惱であり、ブツダにとっては否定されるべきものである。

### 『根本中頌』の中道

ナーガールジュナは、ブツダの言葉を以下のように引用する。<sup>(23)</sup>

MMK 25.10: prahāṇaṃ cābravīc chāstā bhavaṣya vibhavaṣya ca |

tasnān na bhāvo nābhāvo nirvāṇaṃ iti yujyate ||

また師（ブツダ）は、生存と非生存との断滅を説かれた。それゆえ、「涅槃は存在するものでもなく、存在しないものでもない」ということは正しい。

ここでの主題は涅槃とは何かである。ナーガールジュナは涅槃の存在と非存在、つまり涅槃は永遠にあらゆるところで存在し、かつ涅槃は永遠にあらゆるところで存在しないという両極端を否定する。その根拠は、『スッタニパータ』五一四の「非生存と生存とを捨て」（vibhavaṃ ca bhavaṃ ca vipphahāya）というブツダの言葉である。<sup>(24)</sup> 『スッタニパータ』五一四と『根本中頌』二五・一〇によって、ブツダとナーガールジュナが直接繋がっていることがよくわかる。

次に帰敬偈を考察する。

MMK 帰敬偈 : anirodham anupātādam anuucchadam asāsavatam |

anekārtham anānārtham anāgamam anirgamam ||

yah pratyāsamutpādaṃ prapañcopāśamaṃ śivam |

deśayāṃ āsa sambuddhas taṃ vande vadatāṃ varam ||

滅することなく、生じることなく、断ずることなく、常住でなく、一つでなく、多数でなく、来ることなく、行くこともなく、戲論が寂滅しており、吉祥な縁起をお説きになった、諸の説法者のなかで最上の人である正覚者（ゴータマ・ブツダ）に、私は帰依する。

この帰敬偈は、すでに見てきた『スッタニパータ』七七八以下で言われている両極端の否定との中道をナーガールジュナがまとめたものである。帰敬偈は八不の縁起を説くと言われているが、その内容は中道である。ブツダが言う両極端の否定を、ナーガールジュナは帰敬偈で述べる。つまりナーガールジュナは、滅と生、断と常、一と異、来と出という両極端を否定する。

以下、ナーガールジュナの中道思想をいくつか見てみる。

MMK 15.6-7: svabhāvaṃ parabhāvaṃ ca bhāvaṃ cābhāvaṃ eva ca |

ye paśyanti na paśyanti te tattvaṃ buddhaśāsane ||

kaṭyānaāvavāde cāstīti nāstīti cobhayam |

pratiśiddhaṃ bhagavata bhāvābhāvavibhāvina ||

自性と他性を、そして存在と非存在を見る人々は、ブツダの教説のなかに真理を見ない。『カティヤヤナの教』のなかで「ある」と「ない」の二つが、「存在」と「非存在」を知る世尊によって否定された。

MMK 22.14-15: svabhāvaś ca śūnye śmiṃś cintā naivopapadyate |

paraṃ nirodhād bhavati buddho na bhavatīti vā ||

prapañcayanti ye buddhaṃ prapañcāntam avyayam |  
te prapañcaharatāḥ sarve na paśyanti tathāgatam ||

彼（如来）が自性として空であるとき、「ブッダは入滅後、存在する」とか「存在しない」という考えは、まったく正しくない。戯論を超越し、不滅の人であるブッダを戯論する彼ら全員は、戯論に打ちのめされており、如来を見ない。

MMK 25.22-24: śūnyeṣu sarvadharmeṣu kim anantaṃ kim antavat |

kim anantaṃ cāntatavac ca nānantaṃ nāntavac ca kim ||

kiṃ tad eva kim anyat kiṃ śāsvatam kim aśāsvatam |

aśāsvatam śāsvatam ca kiṃ vā nobhayam apy atha ||

sarvopalmbhopaśamaḥ prapañcōpaśamaḥ śivāḥ |

na kvacit kasyacit kaścid dharmo buddhena deśitāḥ ||

すべてのものが空であるとき、何が無限で、何が有限で、何が無限かつ有限で、何が無限でなくかつ有限でもないのか。何が同じで、何が別で、何が常住で、何が無常で、何が無常かつ常住で、さらに何が両方でないのか。「涅槃は」すべての認識の寂滅であり、戯論寂滅であり、吉祥である。ブッダは、いかなる所でも、誰に対しても、どんな法をも説かなかった。

涅槃への道は中道<sup>(25)</sup>であり、言語表現を超越している。ブッダは、涅槃への道という法（ダルマ）を戯論寂滅であると言いたが、その法を戯論として説いているわけではない。それゆえ、ナーガールジュナは「ブッダは、いかなる所でも、誰に対しても、どんな法をも説かなかった」と述べるのである。

## おわりに

ウパニシャッド文献において、はじめて解脱への道が示された。神道やブラフマンの世界という概念やブラフマンという言葉を除き、離欲<sup>(26)</sup>や瞑想<sup>(27)</sup>という解脱の原因を、そして再生しないという意味の表現をブッダは取り入れた。ウパニシャッドの解脱への道を、中道という涅槃への道とした。ナーガールジュナは、ブッダの「生存と非生存の断滅」という両極端の否定という中道思想を根拠にして、涅槃を説いた。それは「涅槃は存在するものでもなく、存在しないものでもない」のであり、涅槃は言語表現できないものである。涅槃への道は中道であり、言語表現を超越しており、したがって言葉が寂滅している。寂滅 (upasama) とは言葉 (prapañca) が滅した (upasama) 世界、言葉を超越した世界のことである。この世界は言葉をとまなわぬ実在の世界であり、吉祥 (siva) である。言葉は両極端 (ubhayānta) と二つ二元対立を基本としており、その超越が中道 (madhyamā praiṭipat) である。

## 略号

- BĀU = Bṛhadaranyakopaniṣad. *The Early Upanisads: Annotated Text and Translation*, Edited by Patrick Olivelle. New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 29-165.
- BhG = Bhagavadgītā. *The Mahābhārata: the Bhīṣmaparvan, being the Sixth Book of the Mahābhārata, the Great Epic of India*, vol. 7. Ed. S. K. Belvalkar. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1947.
- ChU = Chandogyaopaniṣad. *The Early Upanisads: Annotated Text and Translation*, Edited by Patrick Olivelle. New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 166-287.
- ChU1b = Chāndogyaopaniṣadbhāṣya. *Chāndogyaopaniṣat: Ānandagiriṭyāitāṭhasampalīśāṅkarabhāṣyasameta* Poona: Anandāramamudraṅālaye, 1983.

- DhP = Dhammapada. *Dhammapada*, Edited by O. von Hinüber and K. R. Norman, Bristol: The Pali Text Society, 2014.
- KaṭṭU = Kathopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, Edited by Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 372-403.
- MuU = Muṅḍakopaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, Edited by Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 434-455.
- MMK = Mūlamadhyamakakārikā. 『中論頌 梵藏漢合校・導読・訳注』叶少勇、中西書局、二〇一一年
- Paṇini = Aṣṭādhyāyī of Paṇini. *The Aṣṭādhyāyī of Paṇini*, Volume II, Edited and Translated into English by Śrīśa Chandra Vasu, Allahabad, 1891.
- SN = Suttanipāta. *Sutta-nipāta*, New Edition by Dines Andersen and Helmer Smith, Oxford: The Pali Text Society, 2010.
- ŚU = Śvetāśvataropaniṣad. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*, Edited by Patrick Olivelle, New York & Oxford: Oxford University Press, 1998: 413-433.
- UV = Udānavarga. *Udānavarga*, Edited by Franz Bernhard, Göttingen: Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften, 1965.

## 註

- (1) Athakavagga. 漢訳は『義足経』という題名であり、漢訳から想定されるサンスクリットは Arthapadaśūtra である。中村元『ブツダのこゝば』(岩波文庫 一九八四)三三七―三三八参照。『義足経』に関する最近の研究書としては、加治洋一・漢訳仏典研究会編『義足経』研究の視座 附・訓読(自照社出版、二〇一九)がある。この第四章「八つの詩頌の章」に関する最近の研究書としては、石飛道子『スッタニパータ』と大乘への道(サンガ、二〇一六)がある。
- (2) MMK 24.18d. prāṇat saiva madhyamā | 「それは、すなわち中とこう道である」。
- (3) SN 518. nāgo ti katham pavuccati | 「(ナゴヤ) ズレソレ、龍と呼ぶのぢやか」。SN 522. āgum na karoti kiñci loke sabbasanyoge visajja bandhanāni sabbattha na sajjati vimutto nāgo tādi pavuccate tathatā ti | 「(ブツダ) 世間で悪業を少しも作らず、すべての束縛を離れ、すべての束縛に執着しない解脱者、そのような人が龍と呼ばれる」と。SN 845. yehi

vivitto vicareya loka na tani uggaṃya vadeya nago — 「(ブツダ) 龍は、〔欲望を〕離れて世間を遍歴するから、それら (他人の意見) を取り上げて、論争してはならぬ」。

(4) ウパニシャッド文献の研究書については、湯田豊『ウパニシャッド—翻訳および解説—』(大東出版社、二〇〇〇) 六八七—六九七参照。現代語訳については、岩本裕『原典訳ウパニシャッド』(ちくま学芸文庫、二〇一三、初版一九六七)、佐保田鶴治『ウパニシャッド』(平河出版社、一九七九)、Olivelle 1998、湯田二〇〇〇などを参照した。

(5) たとえば、仏教の四苦(生老病死)はウパニシャッドの生死観を受け継いでいる。後藤敏文『Yājñavalkyaのマトマンの形容語と Buddha の四苦』『印度學佛教學研究』(八八、一九九六) 九四—一〇二参照。その他、中村一九八四・四四二—後藤敏文「業」と「輪廻」—ヴェエダから仏教へ—『印度哲学仏教学』(二四、二〇〇九) 一六一—四一など参照。

(6) パーリ語 *pāṭyaṇa*、サンスクリット *pāṭyaṇa*

(7) *Paṇini 5.1.72: pāṭyanaturāyaṇacandrāyaṇan varṭayati* = 「[*Paṇini 5.1.18* の第二次接尾辞 *than* (つまり *-ika*) は] 古伝書読誦、祭祀、月の進行に合わせた苦行に〔後続して〕実行者〔の意味となる]」。 *pāṭyaṇa* (古伝書を誦誦すること) に *-ika* が後続して *pāṭyaṇika* (古伝書読誦者) となり、 *turāyaṇa* (祭祀) に *-ika* が後続して *turāyaṇika* (祭祀実行者) となり、 *candrāyaṇa* (月の進行に合わせた苦行) に *-ika* が後続して *candrāyaṇika* (月の進行に合わせた苦行者) となる。

(8) 中村一九八四: 四一〇参照。

(9) シャンカラ (*Śaṅkara*) は「宗教的義務を備えた子どもたちと弟子たち」(*ChUḅh ad ChU 8.15.1: dhārmikān putrāṅ siśyaṃś ca*) と註釈する。

(10) 「感官を自分のなかに引込める」。 *ChUḅh ad ChU8.15.1: sampratiśthāpya upasaṅhṛtya* | 「安住させて」(つまり) 引込めて」。この表現は後に発展して「ウターナヴァルガ」(*Udānavarga*) や「バガヴァットギーター」(*Bhagavadgīta*) で、亀が肢体を引込めるところを比喩で表現されるようになる。 *UV 26.1: kurmo yathāṅgani svake kapāle samadadhātātmavīrtikṛtāni anīśvīro hy anyam abhetayānah parinīrvīro nāpavadeṭa kaṃcīt* = 「亀が肢体を自分の甲羅に引込めるように、自分の思惟を引込めて、他人に依存せず、他人を悩ませず、完全な涅槃に入り、誰をも非難してはならぬ」。 *BhG 2.58: yada saṃparate cāyaṃ kurmo ḡgānīva sarvasāḥ* | *indriyaṃdriyarththebhyas tasya prajāna pratīhita* = 「亀が肢体をすべて引込めるように、感官を感官の対象からすべて引込めるとき、彼の智慧は安住してこ

る」。

(11) この箇所和訳については、岩本二〇一三：一八九を参照した。

(12) 感官の制御が瞑想であることは、『カタ・ウパニシャッド』(Kātha Upaniṣad) で言われている。KaṭhU 6.11cd. tāṃ yogam iti manyante sñhiraṃ indriyadharaṇam | 「瞑想(ヨーガ)とは、感官をしつかりと握まえておくことであると彼らは考える」。

(13) ブッダ以後の文献である『バガヴァットギーター』のなかでも「再生しない」という表現は見られる。BhG 8.16. a brahma-bhuvanā lokāḥ punarāvartino 'jñāna | māṃ upetya tu kaunteya punarjānma na vidyate || 「ブラフマーの世界から[すべて]の世界に至るまで」諸の世界は再生する、アルジュナよ。しかし、私(ヴィシヌス神)に至れば、クンティの子(アルジュナ)よ、再び出生することはない」。「再生」の意味で punarāvartin 「再び戻ってくるもの」と punarjānman (再び出生すること) という言葉が使われているが、āvartin 「戻ってくるもの」が janman 「出生」と言い換えられており、思想の発展が見られる。なお、「再生」(punar-āv/vrt) という表現は、ウパニシャッド文献で頻出する「再死」(punarṛityu) という言葉と関連性があるようにも見える。再死は祭祀による生天 (svarga) と関連する。

(14) 同じ内容が『チャーンダーギヤ・ウパニシャッド』(Chāndogya Upaniṣad) にもある。ChU 4.15.5. candramaso vidyutam | tapuriso 'mānavah | sa eṇān brahma gamayati | eṣa devapātho brahmapathah | etena prapadyamānā imāṃ mānavam āvartam nāvartante nāvartante || 「(彼らは) 月から電光の世界に[行く]。その(電光の世界にいる) プルシヤは人間ではない。彼(プルシヤ)は彼ら(人間)をブラフマン[の世界]に行かせる。これが神の道であり、ブラフマンの道である。この(神の)道歩みつつある人々は、この人間の渦中に生まれない。彼らは生まれない」。

(15) 後藤二〇〇九：一六一四一参照。

(16) 「再生」ではなく「別生」という表現もある。SN 88 散文 = SN 569 散文 : khīṇa jāti vusitaṃ brahmacariyaṃ ketanaṃ karāṇyaṃ nāparamihattāva ti || 「出生は尽きた。梵行は完成した。なすべきことはなし終えた。別生はない」と。中村一九八四：二六七参照。

(17) SN 742: upādānapaccaya bhavo bhūto dukkhaṃ nigacchati | jātaṣsa maraṇam hoti eso dukkhaṣsa sambhavo || 「執着に縁つて、生存がある。生存する者は苦へ出て行く。生まれた者は死ぬ。これが苦の発生である」参照。

(18) たとえば、生存 (bhava) は輪廻を表現する言葉として『ダンマパダ』(Dhammapada) や『ウダーナヴァルガ』のなか

では、次のように言われている。Dhp 348: muñca pure muñca pacchato majhe muñca bhavassa pārāgu | sabbattha vimuttamānaso na punaṃ jāṭīraṇaṃ upehisi || = UV 29.57: muñca purato muñca paścato madhye muñca bhavasya pārāghaṃ | saravatra vimuktamānaso na punar jāṭīraṇaṃ upeyāsi || 「前を捨つよ、後を捨つよ、中間も捨つよ。生存の彼岸に達した人は、完全に心が解脱しつおり、再び生と死を受けるところがなご。」Dhp 351: nīṭhaṅgato asantāsi vīratāho anaṅgano | acchidda bhavasallāni antimo 'yaṇṇ sammussayo || = UV 26.28: nīṭhāgato hy asantrāsi na vīkantiṭṭi na kaukrīṭṭi | ācchettā bhavasālyanāṃ antimo 'sya sanuucchrayaḥ || 「究極の境地に至り、恐れなく、欲望なく、煩惱(悪業)のない人は、生存の矢を断ち切っている。これが彼の最後の身体である。『ダンマパダ』のパーリ語 anaṅgano (煩惱がない)が、『ウダーナヴァルガ』のサンスクリットでは na kaukrīṭṭi (悪事がない、後悔がない)となっており、この解釈は難しい。『ダンマパダ』と『ウダーナヴァルガ』の和訳については、中村元『ブッダの真理のことは・感興のことは』(岩波文庫、一九七八)を、『ダンマパダ』の和訳については、中村一九七八と藤田宏達訳『ブッダの詩』(講談社、一九八六)を参照した。

(19) Dhp 348cd: na punaṃ jāṭīraṇaṃ upehisi || = UV 29.57cd: na punar jāṭīraṇaṃ upeyāsi |

(20) SN 152cd: kamesu vineyya gedhaṃ na hi jātu gabbhaseyyaṃ punar eti ti || 「諸の欲望に対する貪りを捨てた人は、決して再び母胎に入らなご。」

(21) 『スッタニパータ』(Suttanipāta) の研究書については、中村一九八四・四四七―四五三や村上真完・及川真介『仏のことば註(一)―パラマッタ・ジョーティカー』(春秋社、一九八五) xvii-xxxviii 参照。最近の研究としては、並川孝儀『「スッタニパータ」仏教最古の世界』(岩波書店、二〇〇八)がある。和訳として、中村一九八四や村上真完・及川真介一九八五、同(二)一九八六、同(三)一九八八、同(四)一九八九などを参照した。

(22) コッコの dhammesu は、SN 798 の dīṭhaṃ va suttaṃ mutam va sabbatam 「見たこと、經典、考えたこと、戒禁」のことであると思われるので、「諸の存在しているものに対して」と和訳した。なお、荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄『スッタニパータ『釈尊のことば』全現代語訳』(講談社学術文庫、二〇一五、初版一九八六) 214 は、'dhammesu を「よきよまな宗教的真理」と解釈する。

(23) 『根本中頌』(Mūlamadhyamakakārikā) の最近の和訳として、桂紹隆・五島清隆『龍樹『根本中頌』を読む』(春秋社、

二〇一六)がある。

- (24) Mark Siderits and Shoryu Katsura, *Nagarjuna's Middle Way: Mulamadhymakakarika*, Boston: Wisdom Publications, 2013; 296参照。

- (25) ナーガールジュナが『根本中頌』のなかで、涅槃への道を説いている箇所は僅かである。MMK 18.5: karmaklesaksayan mokṣaḥ karmakleśa vikalpataḥ | te prapañcat prapañcas tu sunyatāyaṅ nirudyate || 「業々煩惱の滅から解脱がある。業々煩惱は分別から〔生じる〕。それら〔分別〕は戯論から〔生じる〕。しかし、戯論は空性〔体験〕のなかで滅する」。MMK 26.11-12: avidyāyaṅ niruddhāyaṅ saṃskaraṅaṃ asaṃbhavaḥ | avidyāya nirodhas tu jñānasyaiva bhāvanat || tasya tasya nirodhena tattan nābhipravartate | duḥkhaścaṅdadhāḥ kevalo 'yaṃ evaṅ saṃyag nirudyate || 「無明が滅じたとき、潜在印象〔行〕は生じない。しかし、無明の滅は、まさにこの知識の修習〔瞑想〕から〔ある〕。〔十二支の先行する〕それぞれが滅することによって、〔後続する〕それぞれが生じてこなく。このように純古蘊は完全に滅せられる」。この箇所の和訳に関しては、五島清隆「龍樹の縁起説(3) — 『中論頌』第二十六章「十二支の考察」について(2) —」(『仏教学会紀要』一六、二〇一)三五—六二を参照した。

- (26) 解脱の原因である離欲の例を挙げよう。BĀU 4.46: athākāṃyamāno yo 'kāmo niṣkāma āptakāma ātmakāmo na tasya prāṇa utkṛānti | brahmaiva san brahmāpy eti || 「それゆえ〔アートマン以外に〕欲望のない人、欲望がなく、欲望を離れた〔アートマンに対する〕欲望に満足し、アートマン〔だけ〕を求める人、その人の諸感官(プラーナ)は〔死ぬときに新たな身体へ入るために〕上方へ出ていかない。彼はブラフマンそのものであり、ブラフマンに行く」。BĀU 4.47: yadā sarve pramūcyante kāma ye 'sya hṛdi śritāḥ | aha mayo 'mṛto bhavaty atra samaśnuta it || 「彼の心臓に宿るすべての欲望が取り除かれるとき、死すべき者(人間)が不死となり、この世でブラフマンに至る」など参照。

- (27) 解脱の原因である瞑想の例を挙げよう。KāṭhU 6.18: mṛtyuproktaṅ naciketo 'tha labdhva vidyāṃ etaṅ yogavidhiṃ ca kṛtsnam | brahmaṇrāpto virājo bhīd vimṛtyur anyo 'py evaṅ yo vid adhyātman eva || 「ナチケータスは、死神から教えられた知識と瞑想(ヨーガ)の方法をすんで得て、ブラフマンを得て、激情から離れ、不死となった。他の人もまた、アートマンに関して知れば、この世にない」。Sū 2.15: yadāmatvena tu brahmatattvaṅ dipopameneḥa yuktāḥ prapāṣyet | ajāṃ dhruvaṅ sarvatattvair viśuddhaṅ jātva devaṅ mucyate sarvapāśaiḥ || 「ヨーガ行者は現生で、灯火の喩えのように、

アートマンの本質（を自ら覚知すること）によってブラフマンの本質を見るだろう。そのとき不生であり、不変であり、清浄であり、すべての本質をこもなうものである神を知って、すべての足枷から解脱する」。MuU 3.1.8cd: jānāprasādena viśuddhasattvas tatas tu tañ pāśyate niskalan̄ dhyañamānañ Ⅱ「知識の明瞭（さ）によりて、内官（サットヴァ）が清浄（な）となったとき、瞑想しながらこの部分のなごもの（アートマン）を人は見る」。MuU 3.2.5cd: te sarvagañ sarvatañ prāpya dhira yuktāmanañ sarvañ evāvisañti Ⅱ「彼ら賢者たちは、あらゆる所で、すべてのものに遍在しているもの（アートマン）に到達し、ヨーガを実修しながらそのすべてのものに入る」。